

名城大学 経済・経営学会会報

No.70・71

『名城論叢』

第十八卷

第二二三合併号 付録

二〇一七年十二月十五日

名城大学 経済・経営学会 発行

オーストラリアにおける国際 フィールドワークにむけて

経営学部 五十畑 浩平

はじめに

二〇一七年八月、名古屋からシンガポールを経由し、オーストラリア・メルボルンに向かった。来年度予定している国際フィールドワークの下見のためである。

これまで経営学部では長いこと欧米地域とアジア地域で国際フィールドワークを展開してきた。しかし、いつどこでテロが起こってもおかしくない時代となり、より慎重にフィールドワークを行う地域を検討しなければならなくなった。もちろん、どこが安全という保障はないが、だからこそ選択肢は多いほうがいい。オセアニアというオプションがあってもいいのではな

いか。そう思い、オーストラリアを欧米、アジアに次ぐ第三のフィールドワークの候補先として考え、実行可能性はともかくまずは提案してみたのがきっかけである。

とはいったものの、オーストラリアについては素人同然。今回初めてオーストラリアの地をまたいだほどだ。私の専門はフランスの若年者の雇用問題や職業教育であり、とくに博士課程の際にはフランスのインターンシップの生成と発展について研究してきた。しかしながら、オーストラリアのそれらにはまったく疎い。

ではどのようにしたら、オーストラリアでのフィールドワークを実現させられるだろうか。頼ったのは、私が所属する日本インターンシップ学会で長年付き合いのある河合理英子氏だ。彼女はオーストラリアにおける職業教育の専門家であると同時に、現地でグローバル人材育成プログラムを実施する邦人企業 D・O・A・Australia 株式会社にてチーフトレーナーとして活躍されていた。

河合氏、またその後継者となった木佐貫佳那氏と繰り返し話し合いを重ねるうえで、課題がクリアになっていくとともに、経営学部と D・O・A 社とがコラボすることによって、すなわち、これまで世界各地で培ってきたフィールドワークの経験

やノウハウと、オーストラリア現地でも多く研修プログラムを実施した経験やノウハウを融合することによって、より質の高いプログラムを開発し、学生に提供できると確信するまでに至った。

オーストラリアについては全くの素人である私ですら、こうして未知のオーストラリアに「フィールド」を広げることができた。このことは、組織として今後長期にわたりこうしたフィールドワークを持続的に発展させていく点でたいへん重要であるように思われる。というのも、こうした現地に詳しいパートナー先とコラボすることにより、たとえその国の専門家ではなくても担当が可能になるからである。

さて、現地での人材育成プログラムに長けたD・O・A社がオーストラリアのなかで薦めてきた都市がメルボルンである。オーストラリアのなかでは第二の都市であるが、世界のなかでもっとも住みやすい街として有名だ。さて、そのメルボルンであるが、世界一住みやすい都市とはどのような街なのだろうか？ また、どのような魅力がメルボルンには秘められているのだろうか？ 現地での視察の体験をもとにひもといていこう。

現地での視察

八月二四日木曜日に名古屋を発つたのち、シंगाポールを経由して翌二五日金曜日、午前七時ごろメルボルン空港に到着した。南半球であるため真冬のような寒さであったが、今回の視

察をオーガナイズしてくれた木佐貫氏が出迎えてくれた。メルボルン空港からは、市街地まで「スカイバス」というリムジンバスが一〇分おきに出ている。主要な車体は二階建の赤いバス。このバスのよいところは、一旦このバスの終着地であるサザンクロス駅に到着したあと、マイクロスバスほどの小さなバスで、指定するホテルなどまで無料で向かってくれることである。そのおかげですんなりとホテルに到着することができた。ホテルに到着し荷物を預けようとしたところ、そのままチェックインすることが許された。小さなホテルで決して豪華とは言いが、小規模だからこそ臨機応変に対応してくれるホスピタリティに感動した。広々とした部屋で、清潔感もあり、快適に過ごすことができた。

その日は、木佐貫氏と今回の旅程に関する打ち合わせを行ったり、今回視察するプログラムについての説明を受けるなどの他は、随分と早めにチェックインすることができたホテルでゆっくり過ごすこととした。

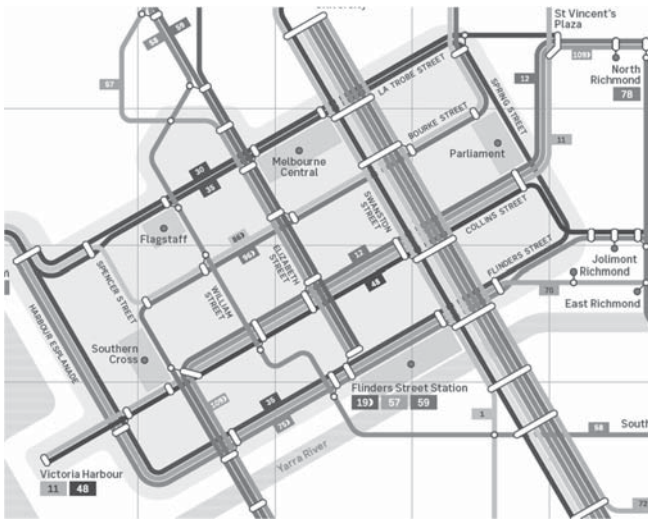
二六日土曜日、この日は終日メルボルン市内を視察した。なんとと言っても旅行者の目を一番に奪うのが、街を縦横無尽に走っているトラム（路面電車）である（写真1）。おそらくほぼすべての旅行者はトラムの写真を撮っていたに違いない。

こうしたトラム、中心街は無料で乗り降りできる。メルボルンの主要なスポットはこのフリーゾーンのなかにおさまっているため、観光にも便利である。このフリーゾーンのなかをぐるっと一周するのがレトロな車体の「35号線」であり、これに乗っているだけである程度の観光ができる。ただし、とにかく路線



(写真1) トラム

街中を環状に走る 35 号線



(写真2) 中心街の路線図街中を環状に走る 35 号線
よく見ると駅名が表示されていない駅も……

が多く、そのわりには路線図もアバウトなため(写真2)、初めて訪れた観光客には、慣れるまで時間がかかりそうである。とくに路線図は、駅名が書かれていなかったり、主要な駅しか書かれていなかったりと、苦労した。

メルボルン市内は石造りの古い街並みが続く一方で（写真3）、その合間合間に新しくできたガラス張りのモダンな巨大建造物がそびえたつ光景をよく見かけた（写真4）。ヨーロッパ



（写真3）古い街並み

パの街並みとは違い、新旧が混ざり合っている。こうした街並みは、悪く言えば雑然さを、よく言えばこの街の多様性を象徴しているようだ。

街を歩いていると、この街にある料理店の多様さには驚かれる。中華料理はもちろん、韓国料理、ベトナム料理、イギリス料理、イタリア料理、ギリシア料理などさまざまな国の料理が手軽に味わえるのも、多くの民族が共存共栄している証しであり、こうしたレストランのレパトリーの豊富さからも、多民族性を実感することができた。

こうした多民族性は、ホームステイをした際にも体験できると、今回の視察を同行してくれた木佐貫氏が教えてくれた。そ



（写真4）巨大な建造物



(写真6) ギリシア料理



(写真5) ベトナム料理

の家庭の民族的バックボーンによって、振舞われる料理も大きく違うことである。

二七日日曜日の午後、メルボルン入りした他大学の学生に対するオリエンテーションを見学した。彼らは、この日の朝、香港経由でメルボルン空港に到着した同志社大学グローバル地域文化学部の学生四名（二年生三名、四年生一名）である。彼らの目的は、二週間の海外インターンシップ（職場体験）であり、一日遅れてやってくる神戸学院大学の学生四名とともにそれぞれが、研修先である現地のホテル、旅行代理店、リサイクルショップ、小学校、高校に赴き、実習を行う予定になっている。同志社大学の場合は大学教員の引率はなく、現地ではD・O・A社が責任をもって彼らを引率するかたちとなっていた。

現地に到着してから実際に研修先で実習をする前の数日間、D・O・A社内において、デスク研修や、メルボルンの街をフィールドとしたシテイウォークラリーが予定されていた。

当日午後は、簡単な街のオリエンテーションが行われ、 ترامなどメルボルンの公共交通機関が利用できるICカード（myki）を、実際駅に行って購入するなどのデモンストラーションが行われた。

二八日月曜日、その日は午前中、同志社大学の学生四名が二手に分かれてシテイウォークラリーを行い、私はその様子を見学した。午後には、神戸学院大学グローバルコミュニケーション学部的一年生四名と引率の教員一名も合流し、午後一時よりデスク研修がはじまった。この研修では、まず、今回の海外研修の受講生全八名が英語で自己紹介を行い、その後、「異文化

理解」、「コミュニケーション」、「リーダーシップ」などをテーマとして、ディスカッションが繰り広げられた。最後に、受講生それぞれが、研修前の時点で自己分析を行った。

二九日火曜日、午前九時より伊藤園オーストラリアへの企業訪問が予定されていた。この企業訪問には、同志社の学生四名が参加し、今回、私も同行させていただいた(写真7)。取締役社長の佐藤匡氏、販売事業部営業課長の園田剛士氏、同部アカウントマネージャーの大塚航希氏の三名に対応していた。

まず佐藤社長のほうからご自身の紹介、従業員の紹介をしていただくとともに、社長自ら伊藤園の沿革、海外展開事業の推移、オーストラリアでの事業展開等を説明していただいた。とくに、オーストラリアは世界の他の地域と違い、「おいしいお茶」といった飲料品の売り上げよりも、リーフ(茶葉)の売り上げのほうが多いことなどが紹介された。また、オーストラリアで茶葉を栽培していることや、そこで育つ茶葉は紫外線が強く日照時間も長いため、日本で育つ茶葉にくらべて三倍以上の量が収穫でき、カテキンの量も多いことなどの情報も教えていただいた。社長からのひととおりご説明していただいたあと、学生から活発な質疑がなされ、同社のオーストラリアにおけるビジネス展開についてより詳しく理解することができた。

三〇日水曜日は学生たちのインターンシップ先やホームステイの様子を見学することになっており、午前九時すぎにまずは市内にあるホテルを見学した。このホテルでは、研修生の興味や関心、また英語のレベルによって、フロント業務、予約業務、



(写真7) 伊藤園での企業訪問

中央が取締役社長の佐藤氏



(写真8) 小学校の日本語の教室
中央がベテラン日本語教員のダイアナ先生

経理、客室業務など幅広い業務を研修生に担当してもらったことであった。次に向かったのが、中心街のオフィスビルにある日本旅行を専門としている旅行会社である。ここに配属された研修生は、東京のおすすめスポットを調べ、提案するタスクを与えられていた。ランチをはさみ、午後一時より現地の小学校を訪問した。この小学校では外国語として日本語が教えられており、ここに派遣された研修生は日本語教員のアシスタントとしてインターンシップを行っていた。この小学校のように、メルボルンでは日本語を教えている小学校や中学校が意外と多く、以前に比べて少なくなっているとはいえないものの、依然として多くの学校で日本語が学ばれている。また、その後今度は日本語クラスがある現地の中高一貫の女子校を訪問した。この学校でも、日本語が学ばれており、研修生はそのティーチングアシスタントをすることになっていた。

その日の夕方、学生たちが滞在しているホームステイ先を二軒訪問した。いずれも郊外の広々とした住宅で、それぞれ複数のゲストを受け入れていた。二軒目に訪れた家は、古くに建てられた建造物で「ヘリテージハウス」に指定されていた。この指定を受けると、市から保護が義務付けられており、改修をする場合は許可が必要となっている。

来年度の実施にむけて

短い滞在期間ではあったものの、メルボルンの街やその魅力について多くのことが学べた。街中にトラムが張り巡らされる

などのインフラ面のよさはもとより、治安のよさ、さらにはどのような民族的バックボーンでも自然に暮らすことができるといった多様性を受け入れる寛容さが、世界一住みやすい街の所以である、今回の滞在を機に知ることができた。

こうした魅力あふれる街を舞台に、来年度、この街の資源を最大限に活かしてフィールドワークを実施していきたいと考える。とくに、現地で感じたフレンドリーな雰囲気を活かし、なるべく現地の方々とコミュニケーションが図れるような機会にしていきたい。そのためにも、今回視察したような企業訪問のほかにも、ひとつは今回の視察でも見学したシテイウォークラリーを取り入れ、実際にグループに分かれて街を散策する機会をつくりたいと思う。また、現地の大学生との交流もぜひ行っていきたい。さらには、宿泊先をホームステイの形式にすることにより、ホームステイ体験を通じて現地の方々とさらなる交流が促進できればと考えている。多くの学生がこのフィールドワークを機に成長できることを願い、今後とも開催にむけて力を尽くしていきたい。